

# 顎変形症

## —あごの変形による悪いかみ合わせは歯の寿命を短くする—

顎変形症とは、顎の変形による顔貌の非対称、近遠心的変形、上下的変形などの形態変化を伴い、咬み合わせや顔貌、発音などの問題を有するものの総称だ。

前歯部でうまくものが噛めないばかりでなく、発音や審美的な問題も有する。また、大臼歯部（奥歯）の負担も大きく、当科での調査においても若年にも関わらず多くの歯が崩壊しているもしくは、失われている方が多く、歯の健康寿命が短いことが考えられる。正しくない上下の顎の位置で歯の治療をしても、歯への負担が変わらなければ、その歯を正しく機能させて長持ちさせることは難しいと考えられる。

当科に来院している顎変形症の患者さんの8割は下顎（下あご）が出ていて受け口になっている下顎前突、2割は、顎が左右にずれている顔面非対称、上顎（上あご）が出ている、もしくは下顎（下あご）が著しく小さいことに起因する上顎前突、上下の前歯が当たらずに奥歯でしか歯が接触していない開咬などと色々な種類の顎変形症の症状の患者さんが来院する。

原因は様々で、家族性に発現しやすいことが報告されているばかりでなく、舌などの周囲軟組織により成長が誘導される場合や、思春期成長以降での身長著しい増加に伴い、下顎骨（下あご）の成長が促進することにより発現する事もある。

琉球大学医学部附属病院では、子供の頃（小学校就学前後）に咬み合わせ、顎の成長や舌の動きや発音、舌小帯の長さなどの診察を行い、将来的に顎の手術を少しでも回避できるように心がけている。

しかしながら成人に近づき、顎を切る手術を必要とする外科的矯正治療の適応になった場合は、検査にて専用の機械での咬み合わせの際の顎の動きや筋肉の強さの計測や、レントゲン、歯の模型などで診断を行ったのちに、術前に歯科矯正治療を行い、全身麻酔下にて上顎骨（上あご）および下顎骨（下あご）のいずれか、もしくは両方の顎を切る手術を行い、正常な咬み合わせをできる位置に顎を動かす。その後、術後の矯正治療により歯並びの仕上げを行い、手術後の顎の位置の後戻りがないことを確認し治療が終了する。矯正治療の期間が2~3年程度、手術のための入院が2週間程度必要となる。

琉球大学医学部附属病院は、顎変形症の外科的矯正歯科治療が保険適用される医療機関である。

近年では、歯科矯正にインプラントアンカーが保険適用され、従来よりもさまざまな歯の動きのコントロールが可能となったため、難しい症例でもシンプルな手術で対応することができ、安定した治療結果が得られるようになった。

三次元的な画像や顔写真をもとに術後の顔貌や顎の位置のシミュレーションを行い、実際の治療のイメージをビジュアル化することのできる最新のソフトウェアにより、診断の精度の向上に努めている。（別図）

三次元的な顎の位置ばかりでなく、顎が前後に動いた際の気道のサイズの計測も行い、将来的な睡眠時無呼吸症候群のリスクを考慮した治療計画の立案も行っている。

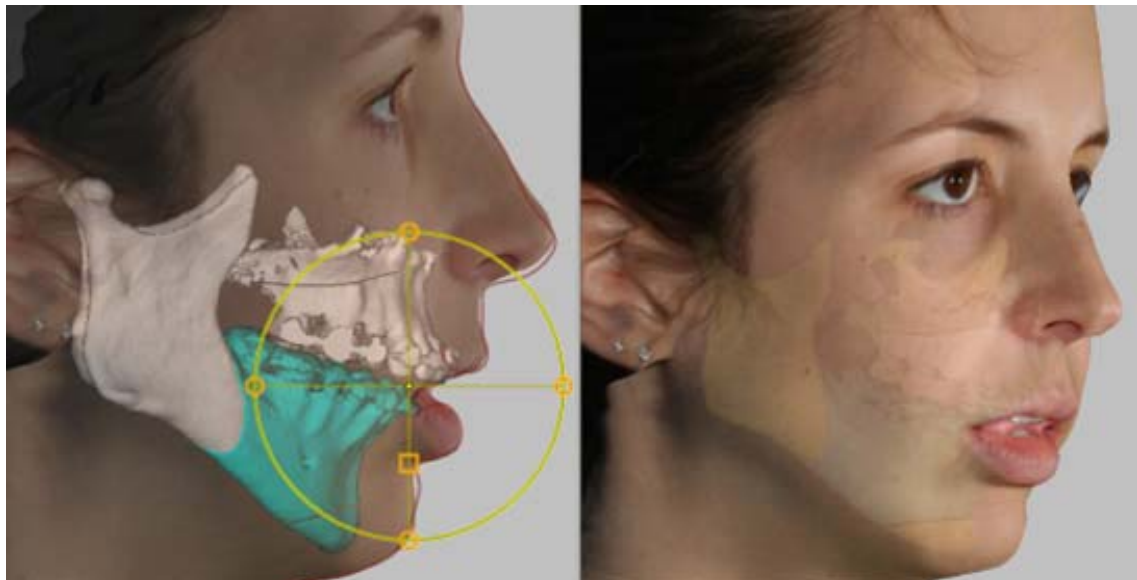
発音に問題がある方には、言語聴覚士による術前後の評価に加えて、言語治療を受けられる体制を整えている。

また、顎変形症に関する発生メカニズムは解明されておらず、当科では現在行なっている顎顔面形態とその遺伝要因の研究で、顎変形症に関する遺伝子変異の同定を目指している。最新の顎口腔機能測定装置や言語評価機能の測定装置での機能的な評価と合わせて、より侵襲の少ない治療法の開発や、原因特定による疾病の予防を目指すべく日々取り組んでいる。

もし、ご自身、御身内、お知り合いなどで気になる方がいらっしゃれば、大学病院への受診をお勧めしたい。

(歯科口腔外科 歯科医師・片岡恵一)

問い合わせは、歯科口腔外科外来895-1314(月～金曜日 ※水曜日を除く)。



Dolphin systemによる三次元的な顎の移動および顔貌のシミュレーションのイメージ (GC オルソリー社より画像提供)